長期透析患者の日常生活・社会生活について

畠山淳子
秋田組合総合病院西３病棟

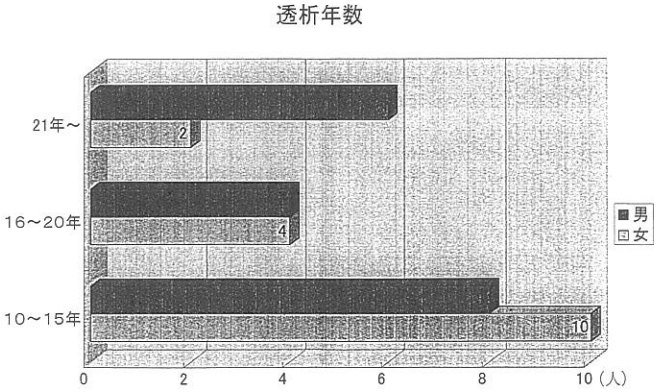
Physical condition and social life of patients with long-term dialysis

Junko Hatakeyama
West 3 Hospital Ward, Akita Kumiai General Hospital, Akita

当院で、透析医療が開始されたのは、昭和44年である。平成11年３月末現在の透析患者は、男性72名、女性65名の137名である。昭和44年頃の透析は、シリコンチューブを埋め込んだ外シャント、手作りのキール型ダイアライザーで、１日８時間の透析であり、患者の身体的苦痛、看護婦の精神的苦痛は大変なものであった。又、昭和46年12月、「親孝行もできずに、莫大な経済的負担をかけて、良いものか。」「弟達の体を傷つけてまでも、生きる価値があるものか」と自殺した患者もいて、世間に大きなショックを発した経験もある。その後、透析医療に対する社会の情勢や、透析技術に対する状況が大きく変化し、患者の経済的負担の軽減や、ダイアライザーの開発が急速に行われ、現在にいたっている。当院では、昭和49年10月導入の61才の男性が、最長透析患者です。今回、10年以上透析医療を受けてきた患者に対して、その思いを、アンケート調査をした。

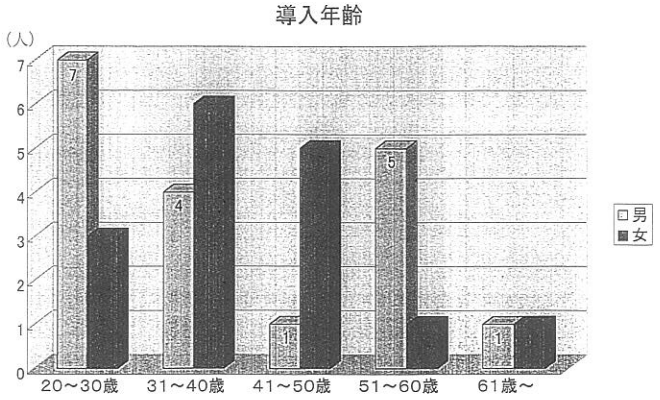
（図１）

対象は、男性18名・女性16名であった。透析年数では、10～15年が最も多く、21年以上経験した患者は、男性６名、女性２名で、最長は、男性で25年５ヶ月であった。



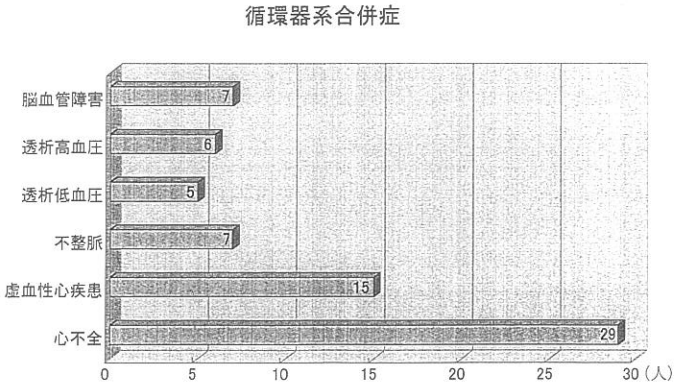
（図２）

導入年令を見ると、20～30才と、31～40才で導入した方が、10名ずつであった。60才以上の導入は、男女１名ずつであった。



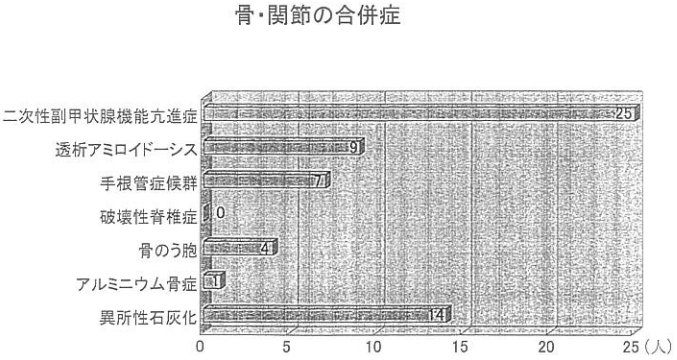
（図３）

循環器系合併症は、体重増加や、高血圧に由来する心不全が多く、虚血性心疾患、脳血管障害が見られた。



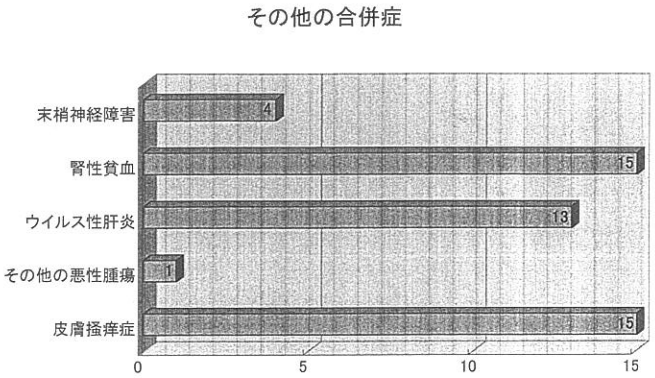
（図４）

骨・関節の合併症は、二次性副甲状腺機能亢進症が25名で、６名が、PTXを施行していた。また、異所性石灰化が14名、透析アミロイドーシスが９名、手根管症候群が７名に見られた。



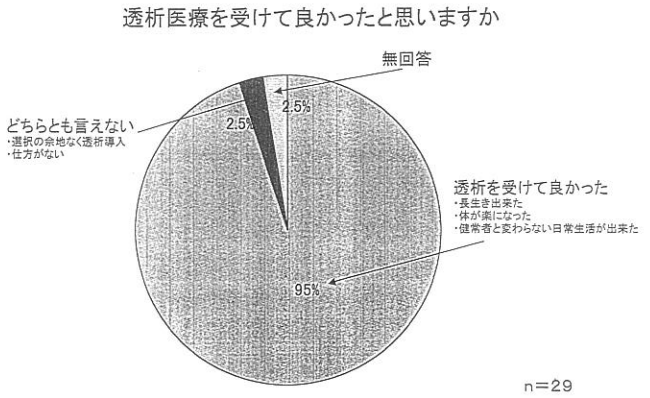
（図５）

その他の合併症は、腎性貧血15名、皮膚掻痒症15名、ウイルス性肝炎13名（15年以上の方12名）である。



（図６）

長期透析患者の95％が、「長生きできた」「体が楽になった」「健常者と変わらない生活ができた」と、透析医療を支持していた。しかし、透析歴23年の患者は、「透析を受けなければ死んでしまう」といわれ、自分で選択する余地もなく、生かされたという、当時の医療の心境を語っている。



（図７）

又、透析医療に対しての不利益として、「再就職ができない」「古い因習により、結婚ができなかった」「障害者というレッテルで、偏見視された」など、内面的事実が、述べられた。

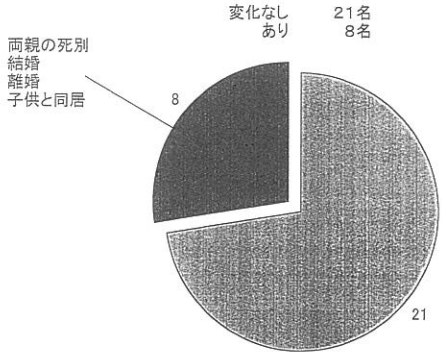
透析を受けた事による利益・不利益

利　益	不　利　益
障害者の気持ちが分かった	精神的負担、不安が多い
健康のありがたさを知った	障害者として偏見の目で見られた
交通費が免除になった	再就職出来ない
快適に日常生活が出来る様になった	結婚出来ない
家族の絆が出来た	友達が離れていった

（図８）

両親との死別以外、家族構成の変化はほとんど見られなかった。

家族構成の変化



（図９）

長期間の支えについては、「家族の支え」が最も多く、「仕事」「自分自身の努力」「友達・医療スタッフ」であった。

長期間あなたを支えてきたものは何ですか

家族	仕事
自分自身	宗教
友達	医療スタッフ
患者会	

（図10）

日常生活上気をつけたことでは、「食べ過ぎ・飲み過ぎ」「体重を増やさない」ことに気をつけているが、厳重な制限や管理にはとらわれず、神経質にならなかったという方が多かった。

日常生活上気を付けたこと

食べ過ぎない
飲み過ぎない
体重を増やさない
データにとらわれない
体を動かす
出来るだけ健康な人と仕事をする
家族に負担をかけない

長年生きてこられた思いは、各々の心にしまわれていたように、多くのことばで、紙面に表された。

「社会では、私を必要としなくても、家族はまだまだ私を必要としています。こんな私でも、長生きしてほしいと、80才になる姑が、農作業を一手に引き受けてくれています」(52才女性)

「親が年々弱ってきて、介護が必要になり、自分自身も足腰が弱り、介護に対する不安がある」(51才男性)

「理解ある主人や、子供、多くの人に支えられ、生かされている命を大切にしたいと思います」(47才女性)

「透析年数を重ねるごとに、自己管理の不安が増し、太く・短くの人生を送りたい」(43才女性)等、前向きな人生への愛着と、将来に対する不安が、混在していた。しかし長期透析患者の多くは、長い年月の間、挫折や、葛藤を繰り返し、自分にあった自己管理方法を見付け、ライフスタイルを確立、維持していること、家族の支えで、自分の存在を安定させていることが、内面的な生きるための力になっていると思われた。

このことは、“春木”の述べた「長期透析患者の心理的問題」を伺わせた。

以上のことから、まとめとして、当院における長期透析患者は、合併症や、老化のための自己管理能力低下や、運動機能障害は、ほとんど見られなかった。又、長期間の透析生活を支えてきたのは、「家族」であり、今後、自分や家族の高齢化による介護の不安を持っていた。介護保険法の実施が迫っている現在、透析患者にどのような介護が提供されるのかが、関心事である。